



一般社団法人 **日本LD学会**  
Japan Academy of Learning Disabilities

# 会 報 第122号

一般社団法人 日本LD学会 事務局（業務委託先）

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター（株）国際文献社

URL <https://www.jald.or.jp>

- ・巻頭言：すべての教員が特別支援学級担任を経験することで問題は解決するのか
- ・新役員紹介
- ・〈大会特集〉第31回大会(京都)事前講義
- ・〈新 連続講座1〉第1回 家庭と教育と福祉の連携「トライアングル」プロジェクト～多職種連携の取り組み～
- ・〈新 連続講座2〉第1回 GIGA スクール時代における特別支援教育
- ・〈連続講座〉研究委員会の取り組み
- ③通級による指導の実態調査報告
- ④算数障害について
- ・委員会リレー企画 Q. 渉外委員会ってどんな仕事をする部署でしょうか？
- ・PATIO～実践の最前線～



## すべての教員が特別支援学級担任を経験することで問題は解決するのか

静岡大学

大塚 玲

2022年3月に特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議によって「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告」がとりまとめられた。この報告では、すべての教員が採用後10年程度の間特別支援学級の担任などを複数年経験することが提言された。小・中学校の特別支援学級の児童生徒数は2011年度の約16万人から2021年度の約33万人と倍増している。特別支援学級担任の臨時的任用教員の比率は小学校23.7%、中学校24.0%で、通常の学級担任のそれ（小学校11.5%、中学校9.3%）よりもかなり高く、その担い手を確保することが喫緊の課題となっている。特別支援学級担任としての経験は、通常の学級における子どもの理解や教育支援にも活かすことができる。また、多くの教員がそうした経験を積むことは、インクルーシブ教育システムを推進していくうえでも意義のあることといえるかもしれない。

だが、しかしである。特別支援学級の担任としての専門性はどのようにして担保するのだろうか。特別支援学級の担任を経験したある30代の教員は、その時の体験をこう述べた。「特別支援学級の担任として学んだことはどれも通常の学級で役に立ったが、通常の学級の担任として身につけてきたことが特別支援学級では何一つ役に立たなかった」。「何一つ役に立たなかった」というのは、いささか誇張しすぎかもしれないが、特別支援学級の担任になってはじめて、そこで必要とされる専門性が通常の学級とはあまりに大きく異なることに戸惑い、苦悩する教員は少なくない。

特別支援学級の担任が、子どもと共に自分自身も成長できたと感じられるような成就感のある経験を積むことができるようにするためには、どのような体制を整えればよいのか。小手先ではなく、教員人事制度の抜本的な見直しが必要ではないだろうか。